

ターミナルケアとホスピ
スの看護研究の動向：
医中誌1983年～2007年
データのテキスト
マイニング

孫 波 (和光大学大学院)
伊藤武彦 (和光大学)
城丸瑞恵 (昭和大学)

第29回日本看護科学学会学術集会
示説 P6-⑦(がん看護)-6

千葉幕張メッセ 2009年11月28日13:00~14:00

日本におけるターミナルケア

近年、人の終末医療/ターミナルケアの関心が次第に高まりつつある。患者の生命を延ばすことよりも、身体的苦痛や精神的苦痛を軽減することをより重視している。

ターミナルケアを専門に行う施設はホスピス(hospice)ともよばれる。ホスピスは、基本的には死期の近い患者を入所させて、延命のための治療よりも身体の苦痛や死への恐怖をやわらげることを目的とした、医療的・精神的・社会的援助を行う施設である。

日本においては近年、ターミナルケアとホスピスについての研究も急速に増えてきている。しかし、論文数の増加などの量的な把握は行われていない。

目的

- 本研究の目的は、看護研究における「ターミナルケア」と「ホスピス」をキーワードとしている論文の量的把握を目的にする。具体的には
 - (1) 各年ごとの論文数の変化
 - (2) 論文題目で頻用される単語
 - (3) 論文題目で多用される表現(係り受け)
 - (4) ポジティブな単語とネガティブな単語
 - (5) 「苦痛」・「家族」・「ストレス」に着目した分析をおこない、ターミナルケアに関する日本語研究文献の特徴を明らかにする。

方法

- 本研究では看護研究において、日本のターミナルケアとホスピスに関して医中誌データベースによる1983年から2007年までの25年間に発表された論文の書誌データ(=題目)をText Mining Studio Ver. 3.0により分析する。
- 医中誌のアドバンスド・モード(Advanced mode)で1983年～2007年の間の文献を対象として、
看護* (ターミナルケア+ホスピス)
の条件式で検索し、論文題目などのデータを分析して行く。

検索式・

件数

- #1 (看護 or 看護) 292,291
- #2 (ターミナルケア or ターミナルケア) 15,130
- #3 (ホスピス or ホスピス) 5,147
- #4 #2 or #3 17,064
- #5 #1 and #4 9,241

9,241件
の文献を
研究対象
とした

表1 論文題目テキストの基本情報

項目	値
総行数	9241
平均行長(文字数)	51.9
総文数	67377
平均文長(文字数)	7.1
述べ単語数	127154
単語種別数	11914

研究数は年々増加傾向にある。
2001年から論文の数が大量に増えている。

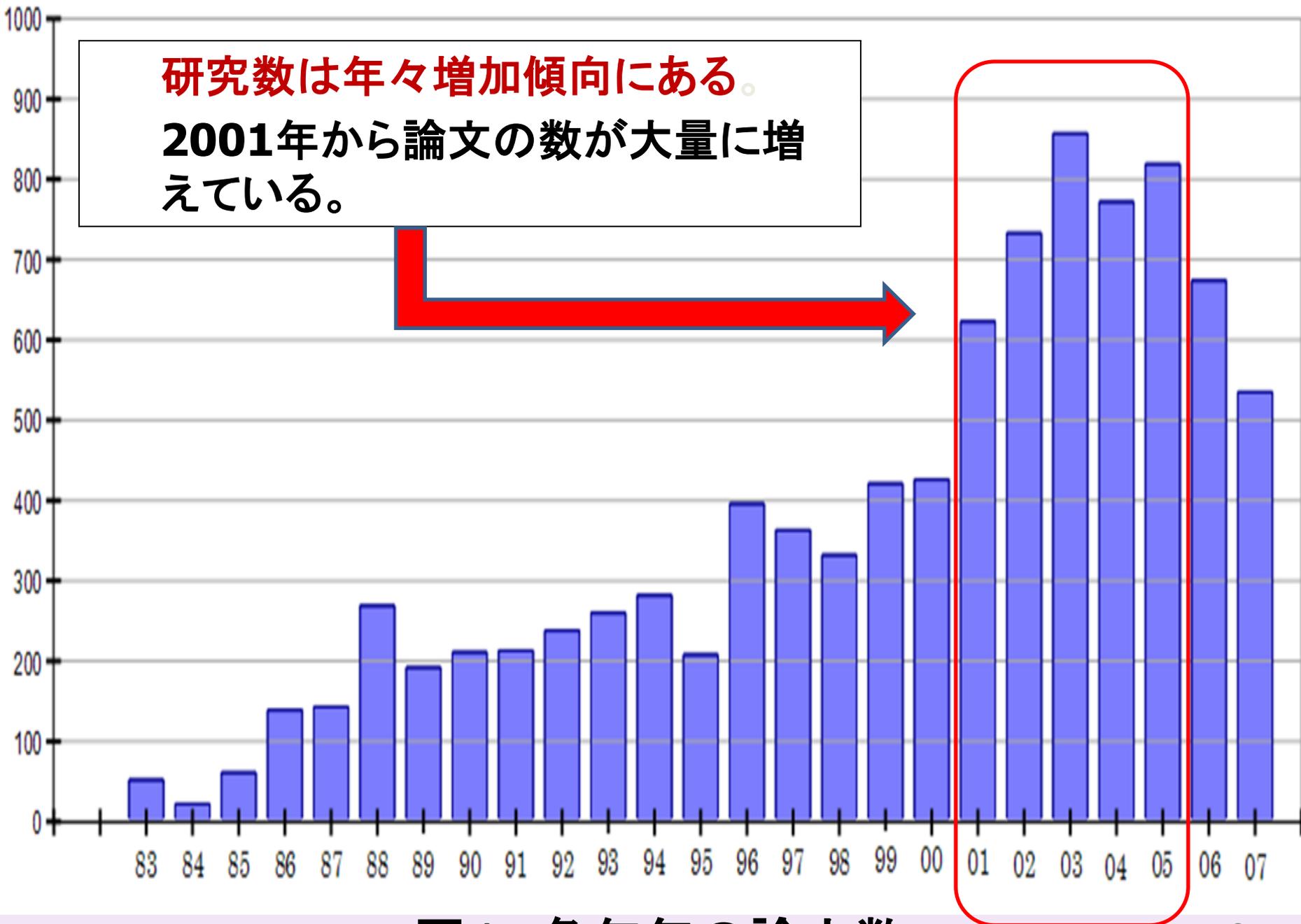


図1 各年毎の論文数

頻度分析(図2)

出現頻度上位20件の単語頻度分析の結果を図2に示す。この結果から見ると、「ターミナルケア」「ホスピス」「看護」「患者」「末期癌」の以外は「家族」「緩和ケア」「態度」などが表れていることをわかった。

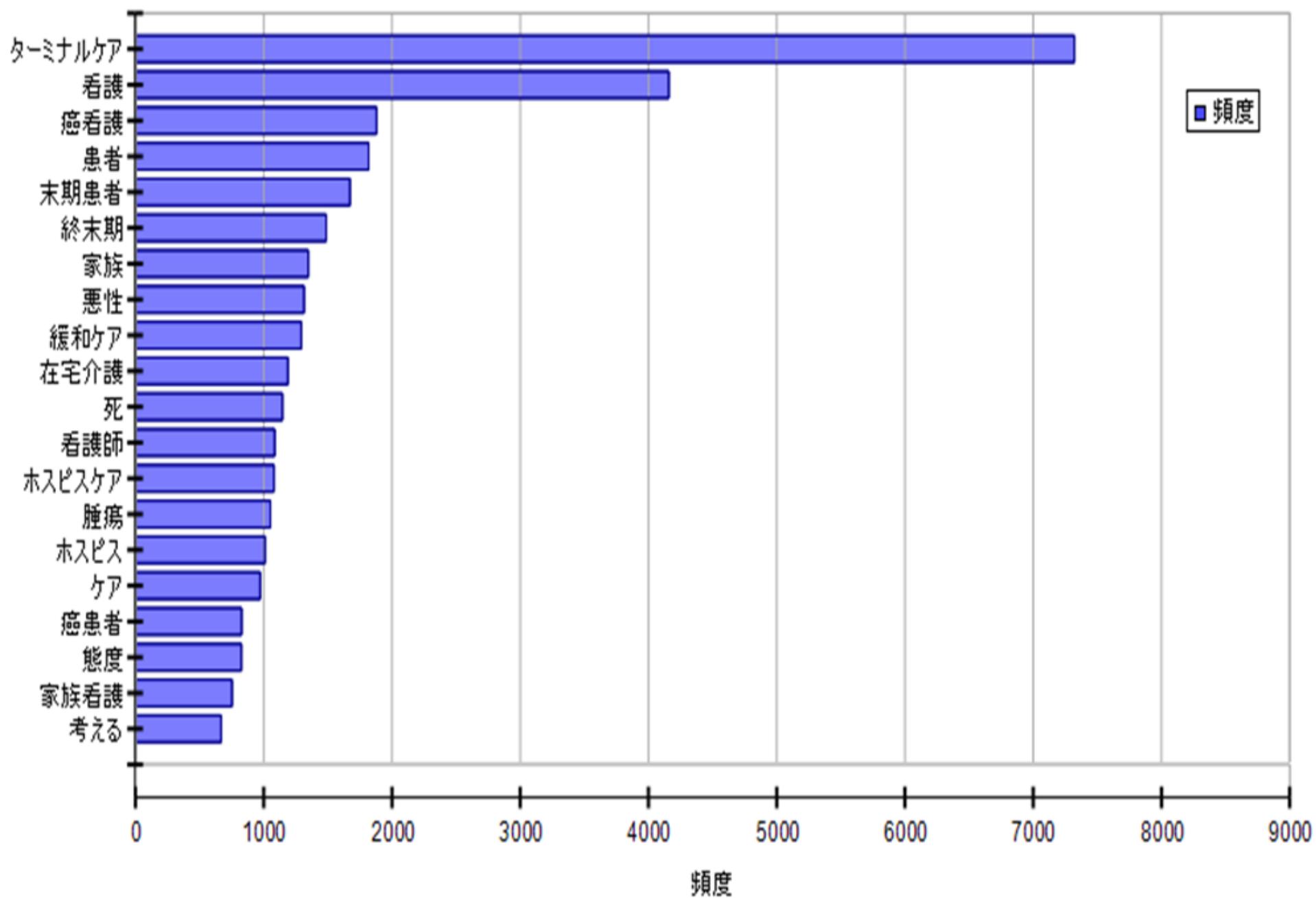


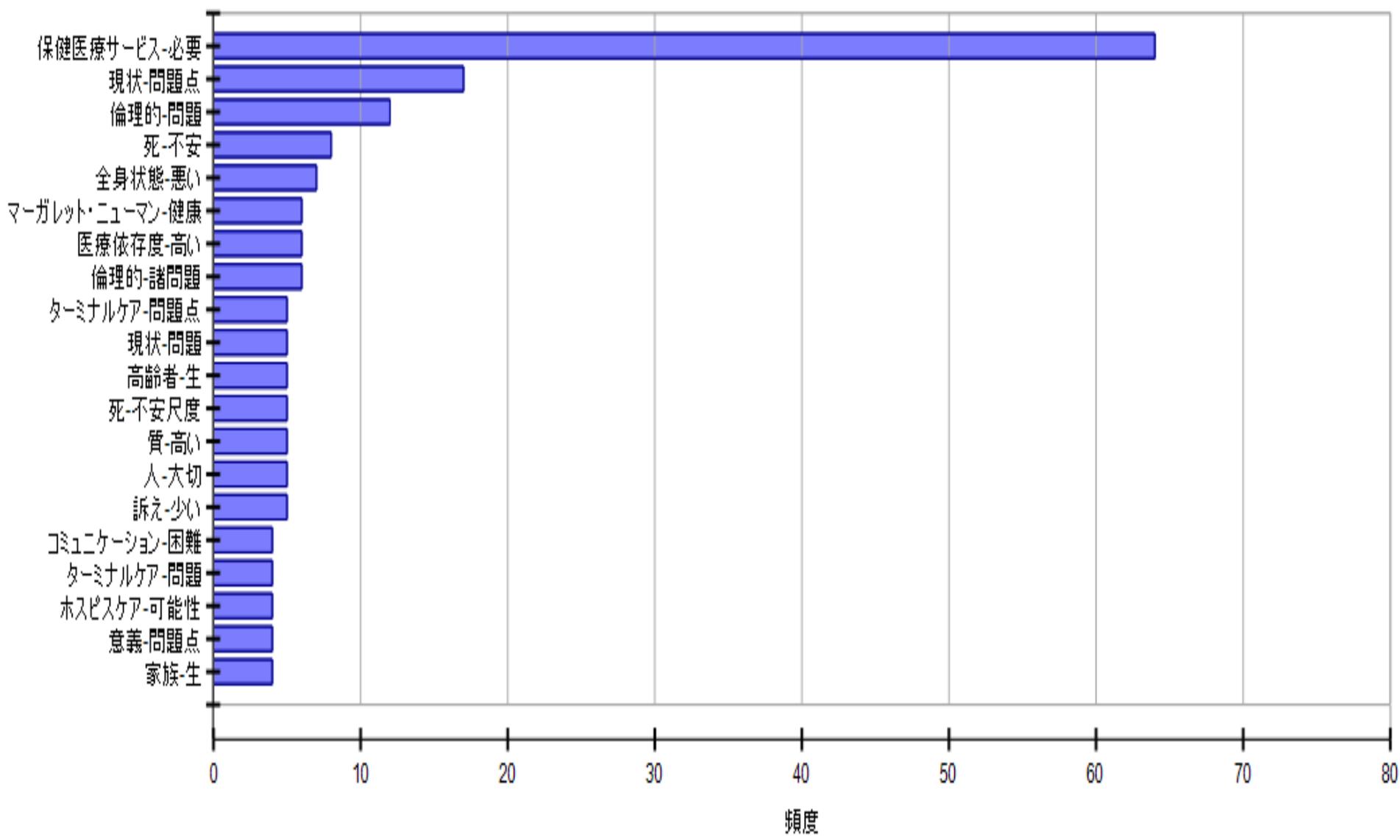
図2 単語頻度

係り受け頻度分析(図3)

係り受け頻度分析の結果を見ると、以下のようになった。

- 1)「保健医療サービス」の「必要」性、「現状」の「問題点」、「倫理的」な「問題」、「死」の「不安」、「全身状態」の「悪い」こと、という項目が最多の5項目であった。ターミナルケア看護の特徴を良くあらわしている。
- 2)「訴え・少ない」「コミュニケーション・困難」の係り受けが注目される。死にゆく人々にとってコミュニケーションが取れることが重要な意味を持つことの表れである。

図3 係り受け頻度分析



評判抽出(図4)

良いイメージで語られる言葉、悪いイメージで語られる言葉を抽出する。「要求」という言葉は肯定的な表現が多い。

これに対して「患者」はネガティブな評価が多かった。論文タイトルを原文参照すると、「死を迎える患者」や「危機状況にある患者」や「疼痛をもつ患者」などがあり、「患者」の単語にネガティブな意味を表す単語が共起している。このため、否定的な表現が多いという結果になっている。

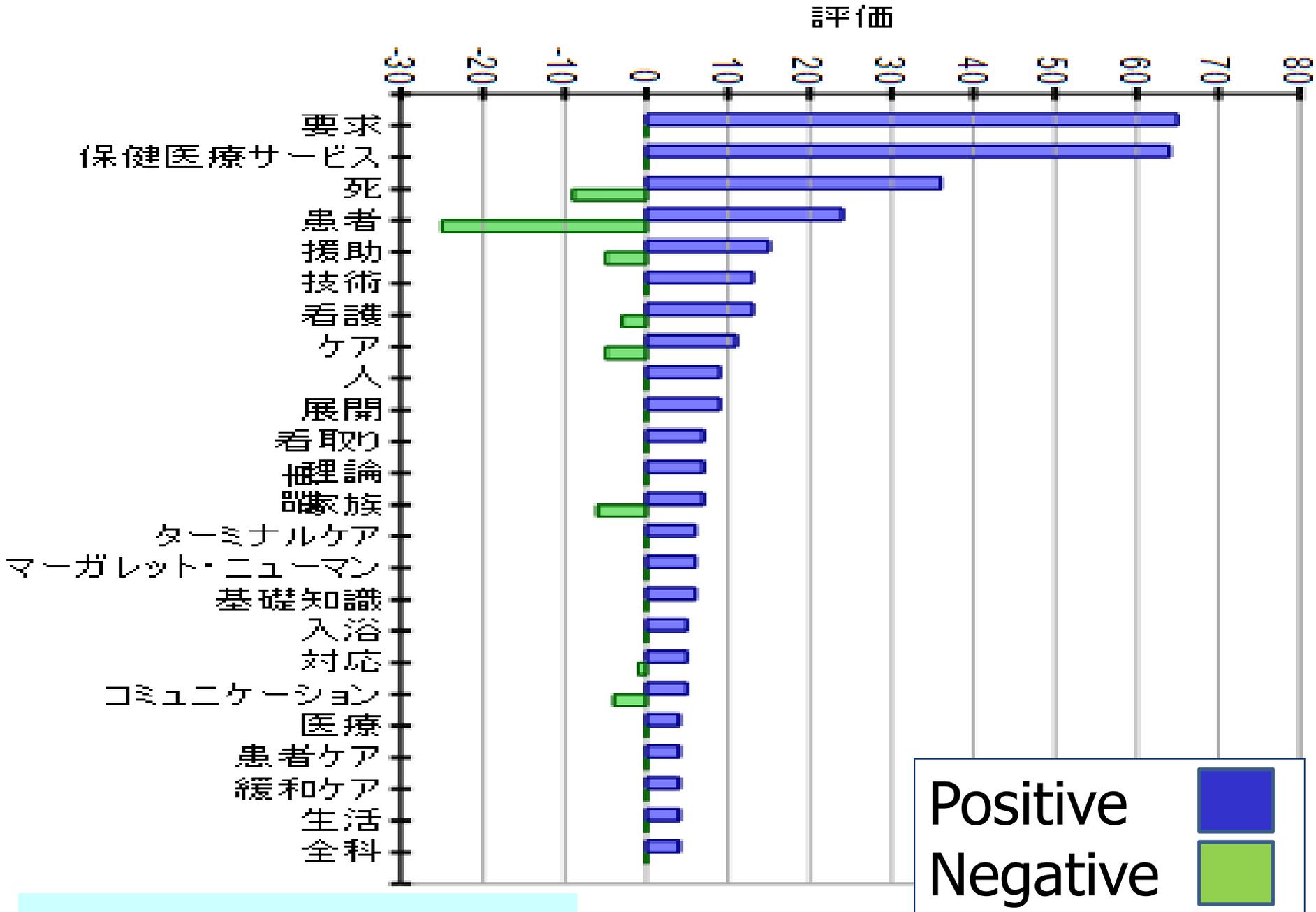


図4 評判抽出

言葉ネットワーク(図5-1)

「苦痛」、「ストレス」、「家族」をキーワードとして言葉ネットワークで分析する。

分析条件：①共起関係を抽出、②品詞はオリジナル設定、③行単位で共起、④最低信頼度を50に設定、⑤2回以上出現する共起ルールを抽出、⑥単語フィルタは「苦痛」、「ストレス」または「家族」を含むもののみとする

頻度

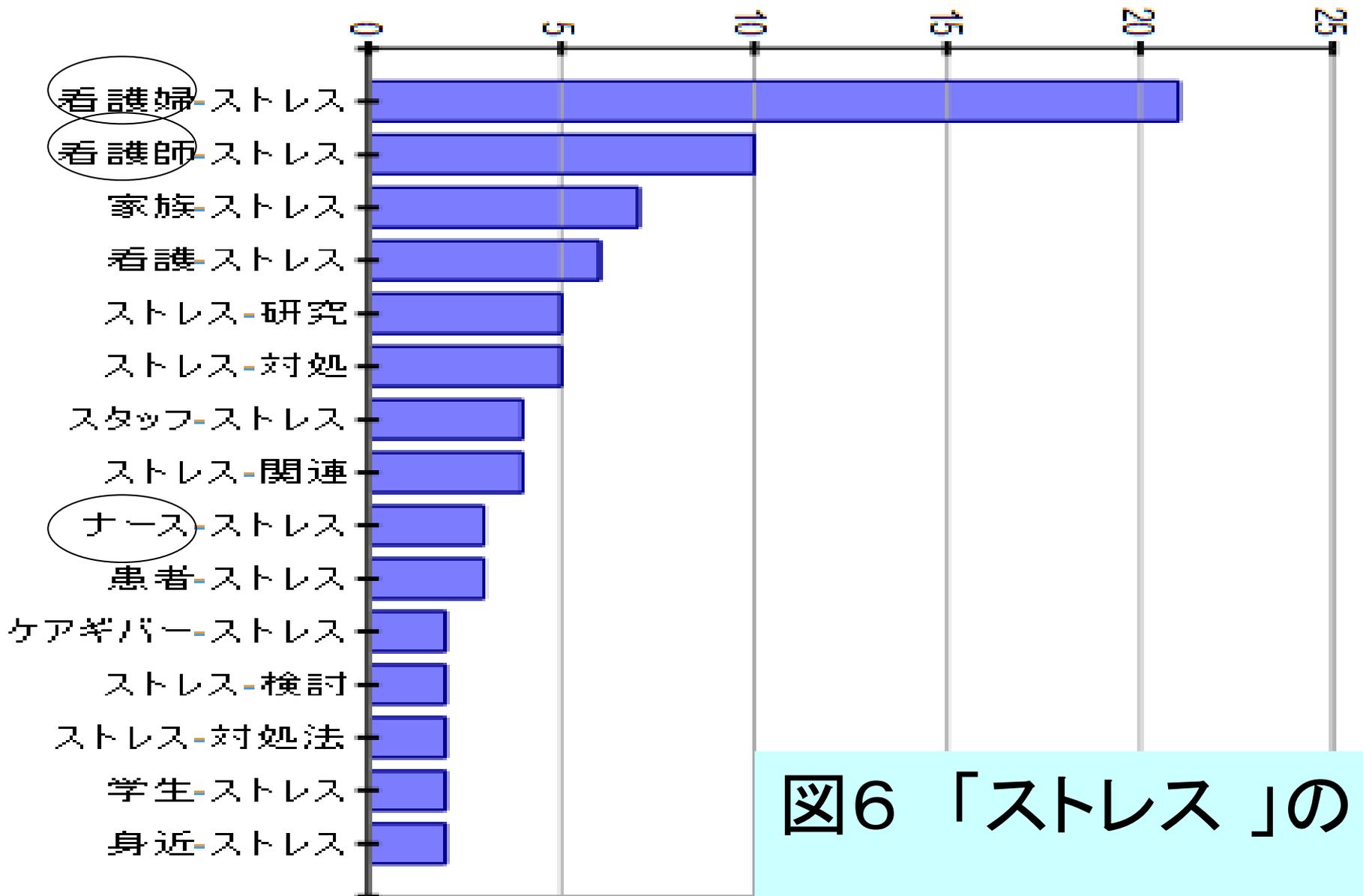


図6 「ストレス」の
係り結び

ターミナルケア看護におけるストレスの研究の特徴

- 注目語「ストレス」の分析結果を図6にあらわす。図6を見ると、看護師のストレスが最も多い、次は家族のストレス、その次には患者のストレスが見られる。
- ターミナルケアの看護師は、他の看護領域に比べて様々なストレスを抱えやすくなると言われる。職場に入ったばかりの新人や職場の人間関係など、ストレスになる原因が様々に考えられる。

※ただし、「ストレス」*「看護」での単語頻度では、患者＞看護師(看護婦&ナース)＞家族となり、医中誌データ「ストレス」においては「患者」が多くを占めている (城丸他,2009未発表)。看護研究一般の頻度とターミナルケア看護研究に限定した頻度とは、大きく様相が異なっている。

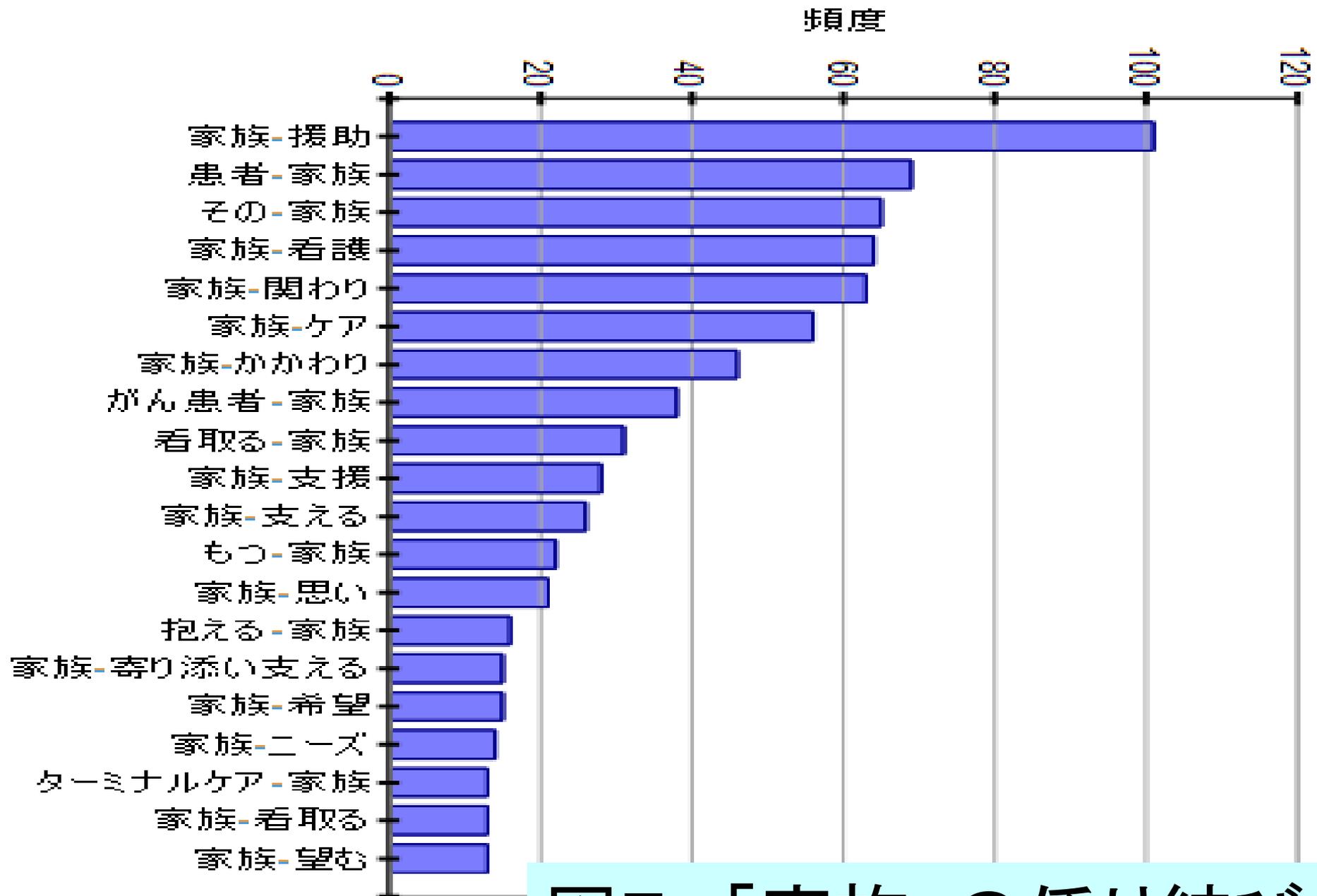


図7 「家族」の係り結び

ターミナルケア看護における 家族の研究と苦痛の研究の特徴

- 図7は「家族」に注目して分析した。「家族一緩和」、「家族一ケア」、「家族一支援」、「家族一支える」などの表現が頻繁に出る。ターミナルケアでは、患者のケアだけではなく、患者の家族のケアも重要である。
- 図8は「苦痛」に注目して分析した。ターミナルケアにおいては、患者の延命を目的にするのではなく、患者の苦痛を減らすための緩和ケアを重視していることが読み取れる。

頻度

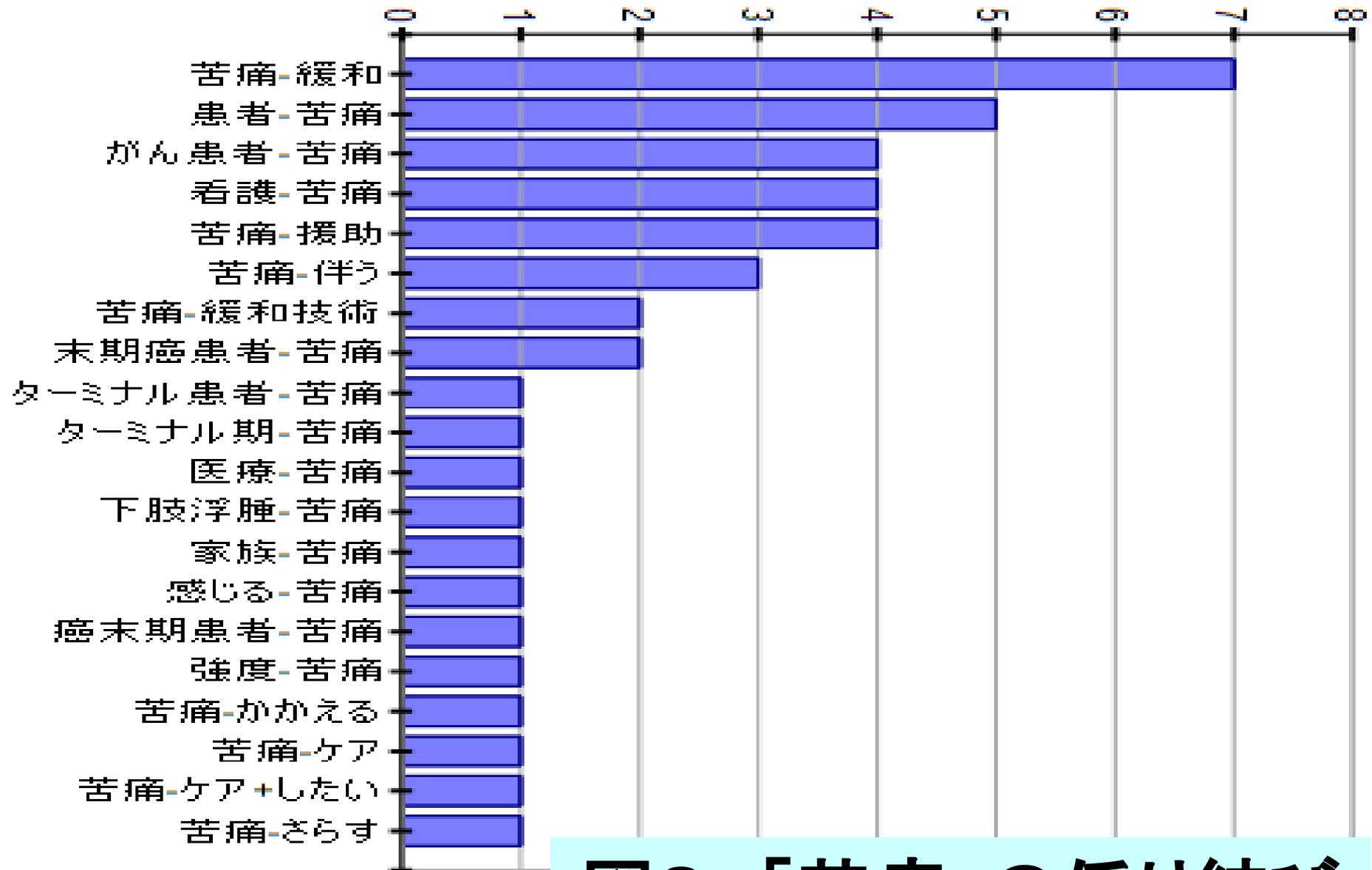


図8 「苦痛」の係り結び

考察

1、研究数の変化を見ると25年間で年々研究数は増加し、2000年代に入ってターミナルケアとホスピスの研究はピークを迎えている。近年下がる傾向があるかどうか今後の推移に注目したい。

2、ストレス研究は看護師自身についてのものが最も多かったことから、ターミナルケアでは、看護師のメンタルヘルスが大きな問題として取り上げられているという、この分野特有の研究動向が明らかになった。

3、ターミナル患者への援助に関する看護研究は、第1に、家族への(社会的な)援助に関するものが多く、次に苦痛緩和という身体的な(医療的な)症状をコントロールする研究が多かった。またケアする側の看護師や家族のストレスも重要なテーマとなっていた。上記の研究数が多い背景には、ターミナル期にある患者の家族に対する精神的援助の必要性を充分認識していても、具体的な援助方法を見出すことが困難なことがあると考える。また、死に直面することで無力感を感じてストレスになることがうかがわれ、看護師自身のメンタルヘルスの必要性が示唆された。

参考文献

- 1、(財)日本ホスピス・緩和ケア研究振興財団
2001年の調査
- 2、「死ぬ瞬間」キューブラー・ロス著／川口正吉訳 1997年 読売新聞社
- 3、「絵でみるターミナルケア」浅野美知恵編集 2006年 学習研究社
- 4、「ホスピス・緩和ケア白書」ターミナルケア編集委員会 1998年 三論書店
- 5、「護理心理学」蔣継国著 2004年 人民衛生出版社
- 6、「臨床護理心理学」陳素坤 周英著 2007年 人民軍医出版社